



「福澤育林友の会」ニュース

第22号 発行日2012年8月1日

福澤育林友の会
東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部
TEL: 03-5427-1050 FAX: 03-5427-1190
<http://www.f-ikurin.jp>



「森と泉の国はどここの国？」

長谷山 彰

(慶應義塾常任理事)

「森と泉に囲まれて 静かに眠る ブルー ブルー ブルーシャトー〜」というジャッキー吉川とブルーコメッツの歌が一世を風靡したのは1967年のことであった。

この歌を聴いて多くの方はフィンランドやドイツの森林風景を思い浮かべたと思う。確かに両国とも森林大国だが、実は日本もこれに劣らぬ豊かな森の国である。大ざっぱに言って、森林面積はドイツの2倍以上、フィンランドの約1.2倍、森林蓄積も両国より遙かに多い。ただし、木材生産量は両国の約4分の1程度と極端に少ない。ちょうど歌の流行った頃から木材生産量、木材自給率が急減し始め、戦後の復興期に600万立方メートルあった木材生産量も今は3分の1程度、9割あった木材自給率は2割程度に落ちている。現状の危機感からこの数年、森林、林業再生への動きが民間でも政府レベルでも盛んになっている。加えて東日本大震災以後、再生可能資源として森林の見直しが進み、山と海を一体とみる環境観も広がっている。まさに「山は海の恋人」である。



こうした経緯を知って思うのは、危機の原因の一つは、国土の約7割が森林であることの意味を国民が忘れかけていたこと、森林保護の問題を環境問題全体との関連で考える教育が不十分だったからではないかということである。古代においてこの国は豊葦原瑞穂国とよあしはらみずほのくにと呼ばれていた。葦の茂るほど豊かな水資源に恵まれ、見渡す限り稲穂が揺れる風景が目につく。そのような平野の営みを支える山の水は川さえあれば自然に流れてくるものではない。森が荒れば水が怒れる龍神のように暴れ回ることは最近の集中豪雨による土砂災害を見ても了解される。



2011年、折しも東日本大震災の年に、慶應義塾は福澤記念育林会から引き継いで、160haに及ぶ広大な学校林を保有することになった。育林会そして福澤育林友の会の皆様に守り育てられてきた森林はだいたい生長してきており、植林、育林の段階から森林資源を活かす「活林」の段階に進みつつある。日本の森林再生、活用を大学という教育研究機関らしい方法で実現する途を友の会の皆様と共に模索していきたい。

「志木高等学校の生徒による森林・林業体験」

－ 森と人のつながりを学ぶ －

吉田 正木

(吉田本家山林部代表 LEAF ナショナルインストラクター 平 13 総卒)

7月24日志木高校の生徒13名、と教員2名は鉄道にて尾鷲に入り、三重県立熊野古道センターを見学後、熊野古道馬越峠を歩いた。夕食後はLEAF (Learning about Forests プログラム) 「森にあるもの」では森にどのようなものがあるか「森の恵み」では身の回りの物で森からの恵みによるものにどんなものがあるかを挙げ、自分達の生活と森には深いつながりがあることを再認識した。

2日目は15年生のヒノキ人工林「志木の森深山」へ。昨年枝打ちを実施し今回作業は無いため見学と計測を行い「志木の森里山」に移動する。こちらは14年生の雑木林で植栽した木と天然更新の木が混在している林である。近年広葉樹林の薪炭への利用が少なくなり高齢化したことで、カシノナガキクイムシによるナラ枯れが全国的な問題となっている。また萌芽更新も高齢になると難しくなる為、里山を伐って利用するサイクルを復活させることの必要性が再認識されてきた。今年春より志木の森里山で順次小面積伐採を行い萌芽更新させるとし、20年間これを続けると1年生～35年生の小さな雑木林の法正林になると思われる。伐採した木は来年の活動の際に使用する薪となる。今回は四カ所の樹木の調査と春からの萌芽更新の変化を観察した。

お昼には流しそうめんを楽しんだ後、3つのグループに分かれカヌー、釣り、サイクリングのレクリエーションで田舎を満喫する。夜は携帯ストラップ作り。様々な樹種の木片から自分の好きな木を選び、削り、磨いてストラップとした。樹種により硬さや触感、香りが違うことを体験した。



3日目は山林見学である。手入れのされている林とされていない林の比較を行い、気付いたことを生徒が発表する。私共が経営する山林を見学し、苗畑、5年生、50年生、150年生などの林を観察、志木の森の将来の姿を想像してもらおう。昼食後は樹齢300年以上の杉、桧が並ぶ参道を歩き瀧原宮を参拝した。一昨年から始めた薪ストーブショップ「ひのき家」研修室にて座学「木をつかうということ」の講義を行い、木のエネルギー利用としての薪ストーブや、楽器（ヒノキカホン、ヒノキギター）を見学した。最後の夕食は鹿肉ジンギスカンである。紀北町のトラットリアラズッカの提供の鹿肉（町内で捕獲）は大変好評であった。自家製木炭で焼いてあつという間に食べつくした。キャンプファイヤーを囲んで「若き血」を歌った。最終日には伊勢神宮、遷宮館を見学参拝後、おはらい町を散策、各自昼食後帰路についた。



慶應志木の森の活動は16年目となり活動も充実してきている。当初は植林や下刈りといった体験であったが、現在では我々の生活が森からの恵みのおかげで成り立っていることを理解し、また近年増加する鹿による山林被害を目の当たりにした上でそれを炭火で焼いて食するといった森と人とのつながりが理解できるような活動となるよう心がけており毎年春と夏に開催している。最初に植えられた木々は随分と大きくなった。ニュース読者の方で初期に来られた方は是非一度覗きにお越し頂ければ幸いである。

「木や竹の温もりを生徒たちに」

－ 今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使いけり－

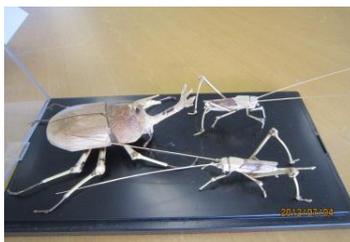
湘南藤沢中・高等部(英語科) 田邊 巧

2008年にハワイ大学マノア校、大学院にて「教育哲学」「環境問題」の授業を取りながら、オアフ島の自然観察をしたり、カウアイ島で教授たちとNative plantの植林作業を手伝ったり

しました。グローバル時代と呼ばれる昨今、人々の行き交いが動植物の外来種を持ち込み、本来その土地に生息していた植物を絶滅に追いやるという取り返しのきかない現実を目の当たりにしました。英語の授業の、特に Reading の内容に一貫性を求めてのハワイ留学でしたが、この環境破壊の現状を知るにつれ、ますます鈴木孝夫先生の提唱される「地球原理」に沿って、金銭的・物質的豊かさを目指すのではなく、精神的豊かさ・生き方を藤沢中・高の生徒たちに紹介しなければならないという使命に駆られています。

The more one has, the more one wants.

GNPの指数向上を目指すより、ブータンの国王が提唱したGNH(Gross National Happiness)「国民総幸福感」の指数を上げることが今や日本の指導者に求められるのではないのでしょうか。ブータンのように贅沢品には思いっきり税金をかけたほうが・・・。



竹で作ったカブトムシと鈴虫

閑話休題

昨年からはミシガン大学大学院のグローバルプログラムに参加し、海を浮遊するプラスチックのゴミ問題の解決を模索しています。自然に戻らないプラスチックゴミは結局、海にたまり、ウミガメやアホウドリを始め多くの海洋動物を苦しめています。一日に4億枚消費されるスーパーでのレジ袋はいつまで続くのでしょうか。私が子供の頃のように、醤油やお酒は「量り売り」に戻し、母親たちは竹製の買い物かごを持って・・・という時代には戻れないものでしょうか。浮遊するプラスチックのゴミが今やテキサス州と同じ面積になっていることを知ると緊急に策を講じなければなりません。

国土の70%近くが森である日本には、このプラスチックの容器の生産をできるだけ抑えて、悪循環を反転させる資源があることを認識することが大切なような気がします。わずか一年で成長する「竹」はまさに無尽蔵の資源です。生活用品に、子供の遊び道具に、手間さえ惜しまなければこれほどの教育資源はありません。里山の保全是シカやクマなどの無用な殺生も避けられるばかりか、綺麗な飲み水を供給してくれます。木の葉の養分を含んだ透明な水は川でトンボや蛍を復活させます。7月の夜の闇に飛び交うホタルを飽きるほど義塾の生徒に見せたいですね。南三陸の頂いた山林の近くに生徒が宿泊できる古民家を移築し、一緒に山にたきぎ拾いに行き、かまどで米を炊き、五右衛門風呂に入り、囲炉裏を囲んで語り合い、田植えをして畑をつくり、などなど。Exchange Programで本校を訪れるイギリス・イートン校やアメリカのローレンスビル校などの生徒を連れて行けば、短期間で「日本の心」を理解してくれるでしょう。今回「森を愛する人々の集い」に初めて参加してパネラーの方々のお話を聞きながら10年後、20年後の湘南藤沢中・高の姿に、勝手に夢を膨らませてしまいました。

【ウェブサイト】<http://www.fullcircle-reduceplasticgarbage.com/index.html>

名誉教授 鐵野善資先生を偲んで

渡辺 知子

鐵野先生は、息子が志木高に在籍していた時の校長先生でした。

先生は、父母にも生涯教育をとということで「SK こんわ会」を立ち上げ、私達に福澤先生や、いろいろな先達の著作や思想、独語等の講義をして下さいました。研究者として、また、熱心な教育者としての情熱あふれる授業は、本当に楽しく懐かしい思い出です。先生とのご縁で、志木の森や、育林友の会の活動に参加し、多くの素晴らしい方々とお会いできたのも、私達の大きな財産となっています。



先生は今年の3月、75歳でお亡くなりになりましたが、六回に及ぶ大手術と、苦しい闘病生活にあっても、新たに「アラビア語」に挑戦、原書で「千夜一夜物語」を読んでおられたそうです。常に前向きな姿勢を貫かれた先生のお姿に、改めて、深い感銘を覚えました。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



平成24年度「研修旅行」

2012.9.8(土)～9(日) 1泊2日

昨年の紀州和歌山研修旅行は、台風12号に見舞われ、余儀なく中止せざるを得ませんでした。再挑戦しようと思いましたが、まだ和歌山では、復旧が遅れている場所も多く延期することになりました。

そこで、今回の研修旅行は、水戸徳川家15代当主、公益財団法人 徳川ミュージアム理事長 徳川 斉正氏に案内役を務めて頂き、茨城県日立市小木津の分収林の見学や水戸市を中心に徳川家に纏わる歴史を勉強していただこうと計画しました。今回の研修旅行に常磐大学学長 森征一氏(前福澤育林友の会会長)も参加され、皆様と楽しく過ごしていただく研修旅行となっております。

研修旅行は、9月8日(土)～9日(日)の1泊2日で、初日は、日本三名園の一つの偕楽園(この時期は萩の花が開花)・弘道館の散策、お昼は水戸老舗の中川楼のうなぎでスタミナを付けて戴き、そして慶應義塾学校林の一つ小木津の山林を見学、徳川様の山林(高萩の大能林業山林)で伐採作業を見学して、水戸駅前にある三の丸ホテルにてシェフ自慢の食事をしながら懇親して頂き、ゆっくりと寛いで頂きます。2日目は、2代藩主光圀公が「大日本史編纂事業」に生涯を捧げるべく穩棲されました西山荘の見学、水戸徳川家の歴代のお墓がある瑞龍山(現在非公開)を見学、徳川ミュージアムで水戸黄門の印籠をはじめ水戸徳川家に関する古文書、大名道具など展示物の鑑賞していただこうと思います。

是非、ご家族やご友人の方をお誘いの上、奮ってご参加ください。皆様方のご参加を心からお待ちしております。



平成23年度福澤育林友の会会計報告

会員；232名(内学生・生徒4名)

平成23年度	収入	支出	摘要	
前年度繰越金	333,479			会費の口座振替について 平成24年度会費の口座振替予定日は平成24年9月24日(月)を予定しています。
会費	1,675,000		H23年度会費(194名分)	
寄附金	649,000			
事業参加費	2,344,000		シボジウム・研修旅行	
利息	248		普通預金利息	
寄附		1,200,000	慶應義塾・育林事業への寄附	
通信費		43,033	会費引落案内通信費	
事業経費		2,344,000	シボジウム・研修旅行(中止による返金)	
手数料		21,824	会費引落サービス手数料	
当年度収支	4,668,248	3,799,617		
次年度繰越金	1,202,110			